公開講演会
京極流箏曲公演
15：30～16：00
芸術館

京極流箏曲および曲目解説

和田一久（京極流三代宗家）

一、京極流箏曲の創立と現在

「京極流箏曲」は、生田流から出た鈴木鼓村（映雄（てるお））が、明治三十四年五月に京都寺町に創立した箏曲の一派である。はじめ「国風音楽会」を標榜し、明治四十一年に「京極流」と改称した。それは、古き革袋に新しき酒を盛る「新古典主義」箏曲である。即ち、演奏の形態を雅楽に取り、箏の組歌の古典的手法を遵守し、しかも歌詞には文学的香気に満ちた抒情詩を厳選して、ゆったりと絃に載せたもので、明治時代末から大正時代初めにかけて京都・大阪そして東京で一世を風靡した。

大正中期、宮城道雄の東京進出に始まる「新日本音楽」の流行は、箏の器楽器としての特長を前面に押し出し、それと対極にいる京極流は徐々に振るわなくなっていった。

昭和六年に二代目宗家を継いだ雨田光平の努力によって「京極流箏曲」は、昭和三十九年に福井県の無形文化財に指定され、昭和四十八年には国の選択無形文化財（記録を取る）にも択ばれたが、令和六年の現在では、これを正しく伝承している者は筆者ひとりになってしまった。

二、京極流箏曲の音楽的特徴

演奏者は必ず自ら弾じつつ歌う。箏の独奏曲として作曲された曲が多く、弾奏だけ、あるいは歌唱だけを別々に分担することはないし、大人数で斉奏・合奏されることもない。

三味線音楽の情緒纏綿たる歌い方を排し、歌は明確な発音で音吐朗々と歌唱される。その声調の骨格は、雅楽の朗詠に採られて直線的であり、細部に平曲の唱法が斟酌されている。

また、箏の組歌以来の「右手十八法」及び「左手八法」、催馬楽や平曲の唱法を研究して新たに制定した「声節十二法」にこだわり、それら古法が正しく守られている。

三、衣装・箏・爪

演奏にあたっては男子は平安朝風の装束を着ける。男子は闕腋の袍に紗冠が正装であるが、演奏に不便を来さないように、古式の袍より袖丈が短く、袖口を絞ることができるようにされている。男子は箏に対して正面に向き、楽座する。両膝がぴったり床に着く。

箏は生田流のでも山田流のでもよい、普通の箏を用いる。鼓村は枕糸（枕芯）を用いることを推奨していた。
箏絃は、どんな材質であれ自分の馴染んでいる種類と太さでよいが、一絃一絃の余韻を重んずる京極流の弾じ方に適うように、太い糸をかなり緩く締める。
箏爪については、ある程度厚い角爪であることに尽きる。もともと鼓村は京生田の角爪を無造作に使っていた。彫塑家であった雨田光平は、それをモデルにもっとずっと薄く、自分で好みの厚さに象牙を削って用いていた。

四、厳島詣　　（明治三十五年五月作曲。若葉調＝六・斗上り平調子）

『平家物語』「後徳大寺殿厳島参詣」に取材して、劇作家でもあった高安月郊の抒情詩に、平曲の声節を充分に生かした曲をつけた、初期の代表作。
曲は瀬戸内の海への船出から、厳島神社のたたずまいの壮麗さ、管絃の宴のたのしさを叙し、やがて場面が転じて、平家の栄華も実定のたくらみも、はかない一場の夢に過ぎないという、現代の詩人・月郊の感慨が月明の下の宮居に託して述べられる。
序には謡曲の趣を取り入れ、曲節は波多野流の藤村性禅から平曲を学びつつあった鼓村が、特に平曲の声節を生かして作曲した。うたは俗に言う「アタリ」がなくて、「年も」のところを除いて折声が浅く折れるのが特徴である。

五、掏衣　　（昭和四年九月作曲。水調＝乃木調子）

初段は鼓村の母・穂積孝女（鈴木孝）の作詩であるが、第二段と第三段は『和漢朗詠集』によっている。水調と称するが、律旋で、宮音は第五絃である。
朗詠風の歌唱を生かすべく、余計な装飾を一切削ぎ落とした構成と、左手五音だけで表現した砧が印象的な聴き所で、晩年の代表作。

■ 和田一久氏の紹介

昭和20年（1945）、大阪市浪速区生まれ。京都大学大学院理学研究科修士課程（物性物理学）修了。富士電機勤務ののち福井に移住。京大在学中の昭和40年（1965）から福井市の雨田光平師のもとに通って修業し、師の没後の昭和60年（1980）に京極流三代宗家を継承した。平成22年（2010）第30回伝統文化ポーラ賞（地域賞）受賞、令和元年（2019）福井市文化奨励賞受賞、令和３年（2021）に京極流研究の集大成である『改稿　京極流歌譜』を出版。レイリー著『音の理論』（1997）、松隅桃仙著『筑紫箏祕録口訣』（1998）、武富咸亮著　『月下記』（1998）、成俔ほか撰『楽学規範訓読』(2008)、成俔著　『虚白堂詩集』（2019）、シュペンケ著『半導体物理学』（2020）など翻訳書・校訂書も多く出版している。